

## 「漢?忍令景君碑」(初拓本)に見る景雲とその周辺

著者	飯塚 勝重
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	49
ページ	1-18
発行年	2014
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00007386/">http://id.nii.ac.jp/1060/00007386/</a>

# 「漢胸忍令景君碑」(初拓本)に見る景雲とその周辺

飯 塚 勝 重

## はじめに

二〇〇四年三月、中国長江の三峡ダム工事が進む中、吉林省文物考古研究所三峡考古隊が、重慶市雲陽旧県坪(今、重慶市雲陽県双行鎮建民村)における漢・晋**胸忍**県古城遺跡から、後漢時代、巴の**胸忍**県令に就任した景君の功績をたたえる石碑を発掘した。「漢巴郡**胸忍**令広漢景雲叔于碑」と称されるものであり、二〇〇六年五月『中国書法』に初拓本写真と共に碑文の紹介が公刊された。さらに、改めてその初拓本が、二〇〇八年、中国・河南美術出版社によって刊行された(以下初拓本という)<sup>1)</sup>(本論はこの初拓本による)。また、この間、『重慶三峡博物館・重慶博物館』(文物出版社二〇〇五年六月刊・本文四頁参照)が碑の前面と両側のみであるが、明瞭な図版を掲載、公刊された。さらに、これに関するつぎのような研究報告が相次いで発表され、中国でも稀に見る石刻遺品として国宝級であると報道されるようになっていく。

(1)『漢晋**胸忍**県城多年発掘屢結碩果 專家談重慶市雲陽県旧県坪遺址発掘的意義(重慶市文物局吉林省文物考古研究所)』(中国文物報

二〇〇五年三月第四版)(以下中国文物報という)

(2) 魏敬鵬「読三峡新出東漢景雲碑」(『四川文物』二〇〇六年二期)(以下魏敬鵬という)。

(3) 程地宇「《漢巴郡**胸忍**令景雲碑》考釈」(『三峡大学学报(人文社会科学版)』第二八巻第五期二〇〇六年九月)(以下程地宇という)

(4) 李喬「從《景雲碑》看景氏起源及漢代以前的遷徙」(『中原文物』二〇〇九年四期)(以下李喬という)

(5) 蒙默「禹生石紐」続弁」(『西華大学学报』(哲学社会科学版)第二九巻第四期二〇一〇年八月)(以下蒙默という)

以下、この石碑について碑形・碑文を紹介しつつ、この碑がもつ歴史的背景及び意義について言及していきたい。

## 一 碑形・碑文の紹介

この石碑の概容については、初拓本に吉林大学教授・叢文俊の解説(以下叢文俊という)が付されており、序文に続いて「一、碑文簡釈」、「二、書法考略」と二段に分けて碑文の形成・碑面の書体などを考察し、楷書に

「漢胸忍令景君碑」(初拓本)に見る景雲とその周辺

よる碑文全文の紹介とともに、前面および両側の碑影を一頁に、碑文局部を二五頁にわたって収載している。碑文の主人公、景雲叔于(諱は雲、字は叔于)の事績等を追究する前に、碑刻全体の構成及び碑面の特徴などを、叢文俊の解説に随い紹介して置きたい(以下単に景君碑という)。なお、本論においては、本論中の引用資料等は、原則として、常用漢字で表記する事をお断りしておきたい。

まず、叢文俊の序文にみる碑全体の構成は次の通り紹介される。

「碑は二つに断裂しており、割れている部分の文字一〇余字が損壊している以外は、完全で新しい物のようである。およそ一三行、三六七字、八部隸書(後述)である。この碑の横は八一cm、縦一八二cm、四周は花紋の図案が彫刻され、有穿(碑面上部の真ん中には丸い穴が穿たれている。<sup>2</sup> 碑は上部が暈(かさ)状(円首碑形)になっており、(碑の)題銘は無く、左側に朱雀(金鳥)が彫られ、右側には玉兔が彫られ、日月を象徴している。<sup>3</sup> 真ん中に婦人(冠を被った婦人)が門を掩(ふさい)でおり、四川蘆山出土の(後)漢・献帝、建安一七年(紀元二二二年)「王暉石棺銘」に、門をふさいでいる婦人が彫られているのと同工異曲の妙がある。<sup>4</sup> 碑の側面に青龍・白虎が浮かし彫りされ、造形はすこぶる生き生きとしている。<sup>5</sup> この碑の形式はきわめて特色を備えており、正に巴蜀文化より出たもので、碑についてなお追求すべきものと雖も、見えるところの彫刻や書法には、中原と拮抗するもので、漢代西南第一位の碑というべきものである。」(一)内は筆者補筆。

以上の序文紹介によれば、この碑は後漢代、益州・巴郡胸忍県令景君、

諱は雲、字は叔于を追悼する碑刻であり(程地字は神道碑とする。<sup>6</sup>)、時代に叶った書法(八部隸書)(後述)と、現地巴郡に共通する装飾彫刻で縁取られている様子が伺われる。但し、碑面両横に彫られた白虎・青竜のそれぞれの頭上に墨色・円形の模様が彫られ、常識的には日・月を思わせるが、僅かに線刻がうかがえるものの、いかなる文様が彫られていたか、判明できないのは遺憾である。なお、叢文俊は碑文紹介の末尾で次のように云う。

「この碑文の書式とこれまで見てきた漢碑の体裁とは異なる物があり、例えば、碑題を額に記さず、且つすぐに卒年を記し、卒年の次に正文を続け、『君諱は謀、字は謀謀』の叙述習慣に依らず、『景雲叔于』に作るなどなどである。この碑には、いくつかの別字に頗る特色があり、衛の字は『𠂔』、況字は『兄』の上に点を加えており、艾字は『𠂔』に従い、『又』に従い、遐字は『假』となるなど、字に古形を保留して居り、楚字の如きは『林』に従い、『足』に従い、中字の下部に二点を加え、野字は『田』に従い、『予』に従い、『土』に従うなどである。」

以上のような指摘を考慮しつつ、原則として初拓本・叢文俊釈文に従い、全文を次に掲出し、碑文に使用された原字との比較は誌面の都合上、別掲の写真版を参照されたい。特に叢文俊の解字および(一)内に他の論著者が指摘する解字の異同のみ末尾に掲げることとしたい。訳文は筆者である。

- 1 漢巴郡胸忍令廣漢景雲叔于以永元十五年季夏中旬己亥卒君帝高陽之
- 2 苗裔封茲嶽熊氏以國別高祖龍興婁敬畫計遷諸關東豪族英傑都于咸陽
- 3 攘竟蕃衛大業既定鎮安海内先人伯況匪志慷慨術禹石紐汶川之會韓屋
- 4 甲帳龜車留遺家于梓潼六族布列裳綬相襲名石冠蓋君其始仕天愷明哲

5 典牧二城朱紫有別彊不凌弱威不猛害政化如神烝民乃厲州郡竝表當亨  
6 符艾大命顛覆中年徂歿如喪考妣三載泣恒過勿八音百姓流淚魂靈既載  
7 農夫悲結行路撫涕織婦啼咽吏民懷慕戸有祠祭煙火相望四時不絶深塹  
8 曠澤哀聲切切追歌遺風嘆績億世刻石紀號永永不滅嗚呼哀哉嗚呼哀哉  
9 讚曰皇靈炳璧郢令名矣作民父母化洽平矣百工維時品流刑矣善勸惡懼  
10 物咸寧矣三考紂劾陟幽明矣振華處實暢遐聲矣  
11 重曰皇靈稟氣卓有純兮惟汝降神挺斯君兮未升卿尹中失年兮流名後載  
12 久而榮矣勒銘金石表績勳兮冀勉來嗣示後昆兮  
13 熹平二年仲春上旬胸忍令梓渾雍君諱陟字伯曼為景君刊銘銘兮

楸——楚 竟——境 況——沆（魏敬鵬＝碑文は沆であるが、沆と杼は「二字読音更為近似」であるから杼とすべきであるとする。程地宇は況とする。）  
渾——渾 六——（魏敬鵬＝九） 浚——（魏敬鵬＝碑面は浚と読めるが浚とする） 亨——（程地宇は享とする） 徂——（魏敬鵬＝殂とする） 遏——（魏敬鵬＝退とする） 慰——（魏敬鵬＝程地宇は側とする） 曼——（魏敬鵬＝寧、程地宇＝曼）  
（後）漢・巴郡胸忍の令、廣漢の景雲・叔于永元十五（一〇三）年・

季夏中旬の己亥を以て卒す。君、帝・高陽の苗裔、茲（ここ）楸（楚）の熊に封じられ、氏以て国と別にす。高祖龍興し、婁敬、計劃して諸關東の豪族英傑を遷し、咸陽を都とす。竟（境）を攘（はら）い蕃より衛（まも）る。大業既に定まり、海内鎮安す。先人伯況（沆）、匪（彼）の志、慷慨するあり、禹の石紐・汶川の会に、幃屋甲帳もて、龜車、留遺（往来）を

「漢胸忍令景君碑」（初拓本）に見る景雲とその周辺

術（述）ぶ。梓渾（渾）に家して、九族布き列べ、裳・統（冕）相い襲う。名石・冠蓋あり。君（景君）、其の始めて仕えるや、天資（性）明哲、二城を典牧し、朱紫別有り。彊きに弱きを凌（おか）さず。威あるも猛き害をせず。政、化（教え）すること神の如し。烝民乃りて州郡に厲（はげまし）て、竝び（上）表し、當に符艾を亨くるべしと。大命顛覆、中年にて徂没す。考妣を喪う如く、三載、泣き恒（かな）しみ、遏（退）（や）めて八音勿し。百姓、涙を流すも、（景雲の）魂靈既に（籍に）載せられ、農夫は悲（いた）み結び、行路に涕撫（おさ）え、織婦は暗咽（すすりむせ）ぶ。吏民、懷しみ慕いて、戸ごとに祠祭煙火有り。相望むに四時絶え不（ず）。深塹・曠澤まで、哀しみの聲、切（うれうこと）切に、遺風を追歌し、（功）績を嘆（たた）えること億世、石に刻み號を紀し、永永として滅びず（不）。嗚呼、哀しい哉 嗚呼、哀しい哉。

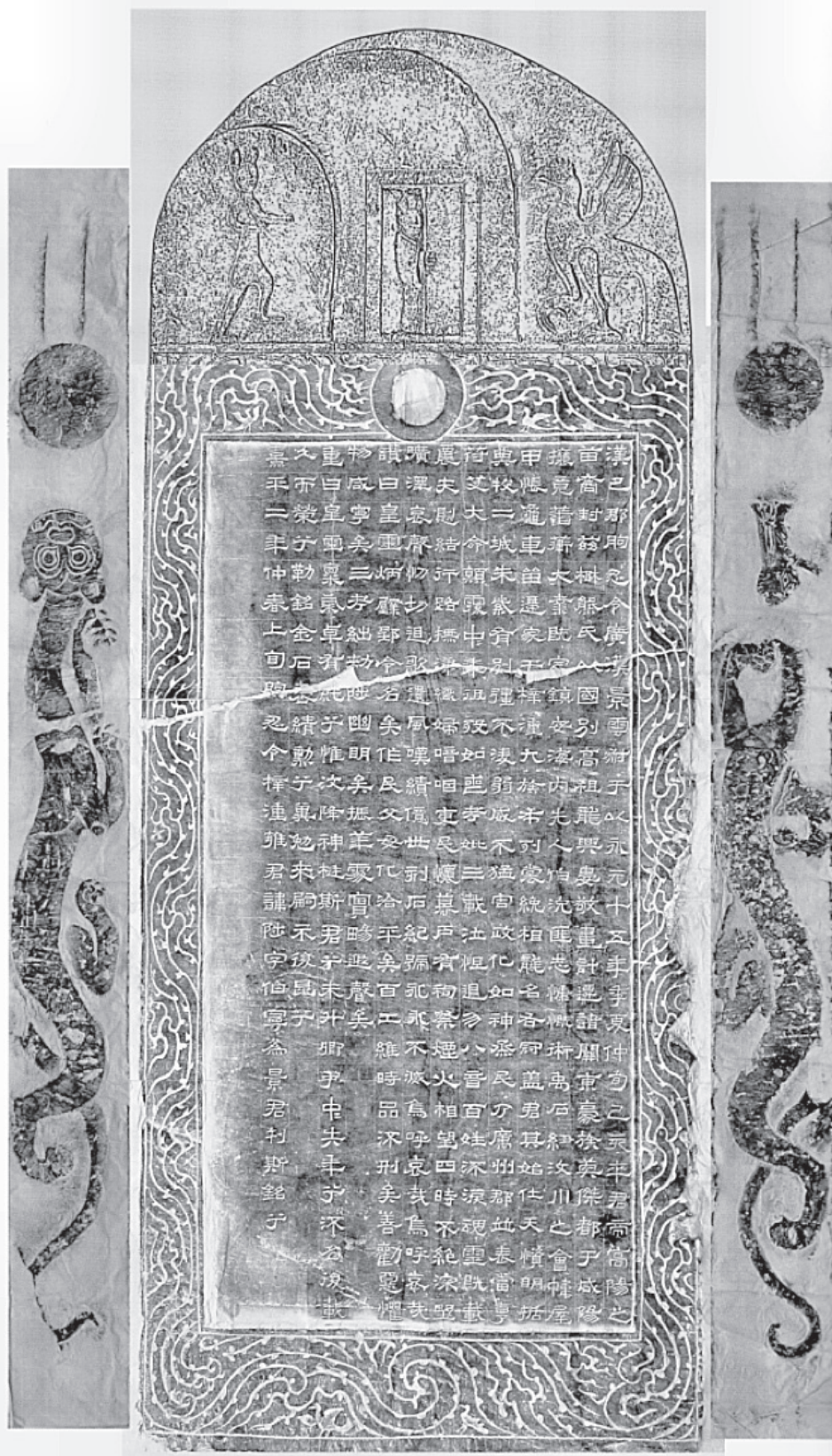
讚に曰く、皇（きみが）靈、炳（かがやける）璧ぞ、郢（楚）の令名あり（矣）。民を作（おこ）し、父母に洽平を化（おし）う（矣）。百工、維時（これとき）に品流（家柄）に刑（のつとる）（矣）。善を勧め惡を懼れ、物、咸な寧かなり（矣）。三考紂劾あり、幽明に陟（のぼ）す（矣）。振華の處實あり、遐（はるか）なる聲を暢（の）ばす（矣）。

重ねて曰く、皇靈氣を稟（う）け、卓（すぐれ）て純（まこと）有り（兮）。惟、汶に神降（くだ）り、斯る君を挺（ぬきん）ずるも（兮）、未だ卿尹に升（のぼせ）ずして、中にして年を失なう（兮）。流名あること後載に久しくして（而）榮（かがやけ）り（矣）。銘を金石に勒し、績勳を（兮）表す。冀くば來嗣に勉めて、後昆に示さん（兮）。

熹平二（一七三）年、仲春・上旬、胸忍令梓渾（渾）雍君、諱は陟字は



巴郡胸忍令景雲碑 (重慶中国三峡博物館・重慶博物館 文物出版社刊所収)



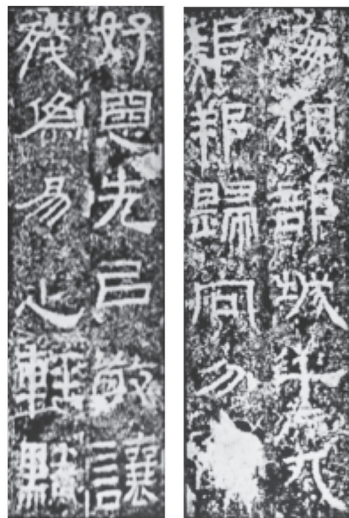
伯曼（尋か）、景君が為に斯かる銘を刊す（号）。

叢文俊の「二、書法考略」には八分隸書に関わる考察と書法史に関する詳細な解説が加えられているが、八分の解釈自体に諸家の説があり、一定していないという。秦の小篆を改良して隸書体が始まるが、前漢代中期、簡牘に書き付ける便宜上を機に発展したといわれる。しかし、八分隸書とは、楷書に達する前段階の八分か、書法・書体の部分が八分に止まるのか、現在でも流派によって意見が異なり、定説は無いと云われる。叢文俊は景君碑の字体の特徴から八分隸書であるというのは、王羲之「蘭亭帖」の近の字の特徴から「近字雁尾波」といわれ、「缺波」別名「擊石波」という戈守智（清・平湖の人、字は達夫）『漢谿書法通解・運筆第四・磔法異勢』の説を次のように引いている。「擊石波の勢い、原本は章草（筆者注・草書の一体）、状は水の泉より流れ出し、その下石に遇い、激して上を過ぎるなり。『書法三昧』はこれを「近字雁尾波」と言い、則ち『蘭亭』「欣」字なり。また、唐人分法毎にこの勢を作り、而して体に肥重を加える、いわゆる「開元式」である」と。筆者は書道史に暗く、具体的な説明も覚束ないが、初拓本の写真により字体を一覧いただきたい。現段階では叢文俊の解説は最も妥当なものと理解する。なお、碑刻には工人の名を刻みこまれるものが多くあるが、景君碑にはその名が見られない。県令雍伯曼の染筆によるか、県令の下に仕える能筆の工人の手によるものではないだろうか。

なお、同じ後漢代に建碑されてその後多くの拓本があり、書道史上様々に研究されている『北海相景君碑』（永嘉元（一四五）年）がある。原碑は山東省齊寧に建てられ、景君碑の重慶市とは東西遠く離れているが全体は八分隸と言われる。ただし、文字はやや縦長気味である。原碑の文字に

欠落等あり、拓本では多くの文字が読み取りにくい、なお多分に「篆意」が残っているという。景君碑と同字が少なく比較は困難であるが景君碑は全体として隙無く優雅な八分隸を保っているといえよう。

北海相景君碑（部分）



程地宇の本注6の指摘は景君碑を神道碑とすることを最も適当とするが、ただし、この碑が墓地、墓石とどのように関わるか、入手した写真や説明に碑の底（下部）に関わる説明等がなく、碑の安定を図るため趺（台）座に差し込む挿榫（ほぞ）<sup>9</sup>がついているが、差し込む先の台座そのものの存在（例えば龜型に刻むとか）<sup>10</sup>が全く不明確である。

後漢時代、県令等の任用は本貫地以外とされるから、景雲の本籍地は益州・広漢郡梓潼県であり、遺体は本籍地に搬送され葬儀が行われたはずであり、景君碑は墓地と関わりなく建碑されたと思われる。常璩撰『華陽国志』卷一・巴郡の条に、「巴郡嚴王思、為揚州刺史、惠愛在民、每當遷官、吏民塞路攀轅、詔遂留之、居官十八年卒、百姓若喪考妣、義送者實錢百万、欲以贍王思家、其子徐州刺史不受、送吏義崇不忍持還、乃散以為食



「漢胸忍令景君碑」(初拓本)に見る景雲とその周辺

行客」とあるのが(―線筆者)一例で任地に墓所が無かったことを意味する。

## 二 景君の出自

後漢の胸忍県(後述)令、益州・広漢郡梓潼県出身の景雲は永元一五(一〇五)年夏、亡くなった。原因は不明である。碑面の最初には、景雲の先祖の由来が示されている。伝説の時代はともかく高陽氏(帝顓頊)の苗裔というから、『史記』卷四〇・楚世家に「楚先祖出自帝顓頊高陽、高陽者、黃帝之孫、昌意之子也、(略)吳回生陸終、陸終生六人、(略)其長一曰昆吾、二曰參胡、三曰彭祖、四曰会人、五曰曹姓、六曰季連、芈姓、楚其後也」とあり、これらに基づき祖先は楚の出自とされる。ただし、碑面の「封茲楚熊氏以国別」については、叢文俊は、「封茲楚熊氏」と読み、魏敬鵬、程地宇、李喬は共に「封茲楚熊」「氏以国別」とする。『史記』楚世家には「周文王之時、季連之苗裔曰鬻熊、(中略)熊繹当周成王之時、擧文・武勤勞之後嗣、而封熊繹於楚蛮、封以子男之田、姓芈氏、居丹陽」と周の異姓諸侯となつたとされ、以後代々、芈姓熊氏の王が継承されていくが、『戦国策』「西周策、雍氏之役」昭應の臧励蘇注に「昭應楚將、昭屈景皆楚族姓」とあり、また「楚策・楚辛謂楚襄王」の同注に、「楚辛、楚莊王之後、以諡為氏」とあるように、楚王の族子が諡を以て氏を立てることが認められていたことが伺われ、景氏は直接の王の諡ではなくも、公族の一人に景氏を名乗る者がでて、その諡を以て熊氏から離れたのではないかと推測される。<sup>11</sup>それが既に宇都本章が指摘されたように、<sup>12</sup>屈原「楚辞」「漁夫」の「子非三閭大夫與」に対する同文を掲げた『史記』卷八四・屈原賈生列伝(與

は歟とする)集解注に「離騷序曰、三閭之職、掌王族三姓、曰昭屈原、序其譜屬、率其賢良以厲国士」と王逸序をあげており、既に歴史的に有名となっていた三世族の一つである景氏の出自であると碑は主張している。そこで、戦国・楚国における景氏の動きをできる限り拾い集めて行きたい。

**景舍** 景氏の個人名が最初に出るのは、『戦国策』「楚策・邯鄲之難」に、昭溪恤が楚の宣王に、趙が魏に攻められようとも、楚は趙を救うことなく共倒れになるのを待てば良いと進言したのに対し、景舍は「不然、昭溪恤不知也、・」と進言して「楚因使景舍起兵救趙、邯鄲拔」とあり、さらに、『水経注』卷三〇・淮水篇に「『竹書紀年』梁惠成王一八(周顯王一六)年、恵成王以韓師敗諸侯師於襄陵、齊侯使楚景舍来求成、即于此也」とあり、楚宣王一七(前三五三)年のことである。

**景翠** 楚の威王(前三三九―前三二九)の時であるが、既に呉を亡ぼした後の越が、王無彊の時、『史記』卷四一・越王勾踐世家に、「越興師、北伐斉、西伐楚、与中国争疆、当楚威王時、(中略)楚三大夫張九軍(中略)景翠之軍、北聚魯・斉・南陽、分有大此者乎、(中略)於是越遂釈斉而伐楚、楚威王興兵而伐之、大敗越、殺王無彊、尽取故呉地、至浙江、北破斉於徐州」とあり、斉の威王の死去年代と関わり、六国年表も威王七(前三三三)年とするが、それ以降とする注釈もある。また、『戦国策・東周』(高誘注・四部備要本)には、「秦攻宜陽、周君謂趙累曰、子以為何如、対曰、宜陽必拔也、君曰、宜陽城方八里、材士十万、粟支数年、公仲之軍二十万、景翠以楚之衆臨山而救之、秦必無功、(中略)、謂君景翠曰、公爵為執圭、官為柱国、戦而勝則無加焉也、不勝即死、(中略)、景翠得城於秦、受宝於韓、而徳東周」とあり、『史記』六国年表では、周・顯王三四年、楚・夷王五年、

前三三五年のこととし、その後も周は景翠を用いようとした記事が見られるが、年代は不詳である。

**景鯉** 懷王即位の年（前三三八）、『戦国策・楚策』によれば、斉の使いが楚の西北の土地五〇〇里を求めて来たとき、懷王は上柱国子良、昭常、景鯉らの意見を聞き、「王以三大夫計」を巧みに使い、結局は斉に断念させるのであるが、景鯉の意見は、「不可与、雖然楚不能独守（中略）臣請西索救於秦」と答え、王命により秦に赴き、秦師の斉への派遣に成功、斉はこれらを見て断念した、とある。

**景缺**（或いは景快と同一人か）『史記』卷四〇・楚世家に、「懷王二九（前三〇〇）年、秦復攻楚、大破楚、楚軍死者二万（秦本紀三万）、殺我將軍景缺」（同卷一五・六国年表も同一）とあるが、同卷四一・秦本紀、昭襄王六（前三〇〇）年には、ただ「庶長奐伐楚、斬首二万」とあるのみで景缺の記事はない。しかし、同昭襄王九（前二九八）年に「奐攻楚取八城、殺景快」とあり、景缺と同一人か別人か或いは錯簡か、議論のあるところであるが結論は困難である。

**景陽** 『史記』卷四〇・楚世家、考烈王六（前二五七）年に「秦圍邯鄲、趙告急楚、楚遣將軍景陽救趙」（ただし、この時の楚は春申君を遣わしたもので、景陽の派遣は一五年ほど前のことであるとの『史記会注考證』の指摘もある）。

このほか景氏としては屈原以降に出た、宋玉らと並んで詞・賦に優れた**景差**（『史記』卷八四・屈原、賈生伝）、秦・漢交替の際、陳渉興起の間隙を縫って広陵の人秦嘉が楚人の**景駒**を楚王に立て、反乱を起こしたが間もなく項梁に滅ばされた（『史記』卷七・項羽本紀ほか）とあ

「漢胸忍令景君碑」（初拓本）に見る景雲とその周辺

姓・名	有記事年代	地位・職掌	出典	関連事項
景氏	戦国・楚	三閭大夫	史記八四屈原賈生列伝	楚辞・王逸・離騷序 掌王族三姓昭屈景
景舍	楚宣王元 前三六九		戦国策・楚策	趙救出、昭溪恤と対立、 使景舍起兵救趙
景翠	楚威王七？ 前三三三？ 前三三五？	三大夫 柱国	史記四一越王 勾踐世家 戦国策・東周	楚大破越、史記六国年表 同とするも年代諸説有り
景鯉	楚懷王元 前三二八	三大夫	戦国策・楚策	斉土地要求、景鯉西索救 於秦
景缺	懷王二九 前三〇〇死	將軍	史記四〇・楚 世家	秦復攻楚殺我將軍 六国年表同じ
景快？	秦昭王九？ 前二九八	將	史記五秦本紀	庶長奐攻楚取八城殺其 將景快 缺と同一人か
景陽	楚考烈王六 前二五七	將軍	史記四〇・楚 世家	秦圍邯鄲趙告急楚、楚遣 將軍景陽 春申君説あり
景差	屈原死（前二 七八？）以降	詞・賦大家	史記八四屈 原賈生列伝	景差とする
景駒	秦二世元一 前二〇九死	楚王	史記七・項羽 本紀	当是時秦嘉已立景駒為 楚王（楚の人）、項梁討
景伯	楚考烈王二二 前二五一死	柱国	史記一五・六 国年表	柱国景伯死

戦国・楚国景氏一覧



「漢胸忍令景君碑」(初拓本)に見る景雲とその周辺

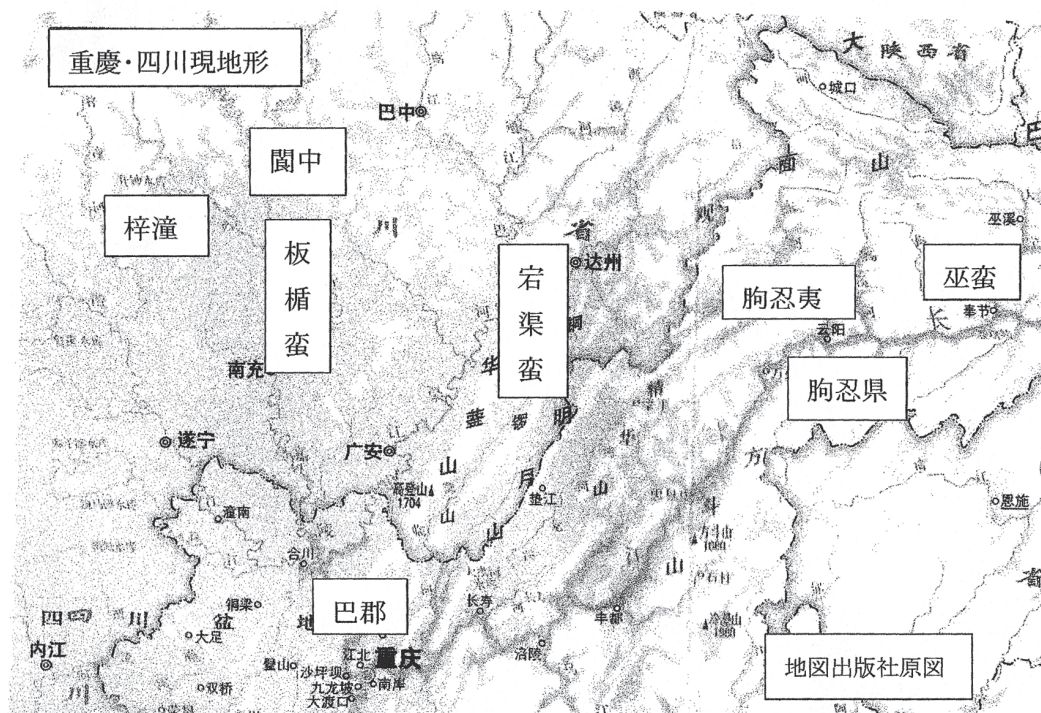
る。以上のような楚における景氏の位置は景君碑で記すよう、『史記』巻八・高祖本紀、高祖九(前一九八)年に「是歲徙貴族楚昭・屈・景・懷・齊田氏閬中」とあるのが、景氏の出自を端的に示しているといえよう。

### 三 閬中・巴・蜀における景氏

前漢・閬中における景氏 既に見てきたように戦国楚の貴族景氏は、漢の建国と都咸陽の建設に伴い、閬中盆地開発の役割を背負って他の貴族・豪族と共に前一九八年、一族を挙げて移動した。『史記』巻九九・劉敬伝において、劉邦は当初都を洛陽にと考えていたが、婁敬(後劉敬となる)の進言により咸陽とすることを決した。婁敬は「且夫秦地被山帶河、四塞以為固卒然有急、百万之衆可具也、因秦之故、資甚美、膏腴之地、此所謂天府者也」と上言した。この間北方に勢力を固めた匈奴冒頓単于の侵入と高祖劉邦が単于にとらえられる事件が起こったが、婁敬の画策により無事脱出する。この事件により、婁敬はさらに上言する。「今陛下雖都閬中、實少人、北近胡寇、六国之族宗彊、一日夕變、陛下亦未得高枕而臥也、臣願陛下、徙齊諸田、楚昭屈景、燕趙韓魏後及豪族名家居閬中、無事可以備胡・諸侯有變、亦足卒以東伐此彊本弱末之術也」と。これに対し「上曰善、迺使劉敬徙所言閬中十余万口」とあり、「索隱曰案小顏云、今高陵・櫟陽諸田・華陰・好畤諸景、及三輔諸屈・諸懷、尚多此時所徙也」と注がある。『漢書』高帝紀第一下・九(一九八)年一月に「徙齊楚大族昭氏屈氏景氏懷氏田氏五姓閬中、与利田宅(師古曰利謂便好)」とある。都長安(高祖五年)が築かれると共に、秦の滅亡により混乱した閬中平原の治安を図り、北方

から進入を伺っていた匈奴の蛮からの防衛や旧戦国六国勢力の反抗にも備える為であったろう。なお、華陰は閬中平原への東の入り口に当たり、好畤は咸陽の西に当たる。景氏一族は東西二個所(『漢書』地理志は長陵にも徙すとある―後述)に移されたのであるが、建国当初の前漢王朝の基礎を築く先導役を担わされていたと思われる。しかし、その後、景氏は前漢一代を通じて特別に有力な官僚・軍人が出た記録も見えない。その上、後に一族挙げて蜀の梓潼に移り住むのであるが、その時期は明瞭ではない。今、碑文にそってその時期を考察してみよう。

梓潼移住の景氏 碑文は景雲直接の祖先の記述となるが、頭初の先人伯況(沆Ⅱ杼)とはいつの時代、どのような地位にあったか不明である。「大業既定鎮安海内。先人伯況匪志慷慨術、禹石紐汶川之会、韓屋甲帳、龜車留遷、家于梓潼、九族布列、裳統相襲、名右冠蓋」とあり、魏敬鵬と程地宇は「先人伯況」より景雲の直接の祖に関わる記述の初めとするが、蒙黙は「大業既定鎮安海内、匪志慷慨術」と先人伯況を抜いて説明する。魏敬鵬は、嘗て景氏は伯禹の佑(助)により禹の会同に列し、夏の礼装を継ぐ家柄として「伯沆(杼)的英明保佑后人世為宦官、冠蓋服飾和車上、又指仕宦、貴官或宦官世家」というも、梓潼への移住時期には触れていない。程地宇は本文を「先人伯況匪志慷慨」と切り、「術禹石紐」「汶川之会」とつなぎ景氏は聖禹の後を承け、韓屋甲帳、龜車を連ねる家柄であったが、前漢初め移住させられ、今、禹の聖地汶川にきて車から見ると、東北方が移住した聖地に当たるとして、「先人伯況在汶川朝聖帰来、所乗之車、留滯于途中、于是就在梓潼定居下來」とあり、名右冠蓋の家柄として、以下梓潼に定着したとする。一方蒙黙は、先ず、有名な前漢末、揚雄『蜀王本紀』の「禹



巴郡胸忍県・胸忍夷関係図（後漢）

本文山広柔県人生石紐、其地名痢儿畔（譙周『蜀本紀』は「割儿坪」とする）を引き、「禹生石紐」について詳細な注釈を加え、漢代の汶川県は綿虜県と言ひ、故広柔県にあたり、唐代の茂州汶川県の西七十二里にあたる。今の汶川県であるが、漢代には汶川県はなかった。漢代にある汶江県すると広柔県は汶江と綿虜の西にあり、汶と岷が二字通用とすると今の岷江が汶江であり、其の西に割儿坪則ち石紐があり、会同に適する土地がある、とする。しかし、ここで蒙黙は、元来、禹が石紐に生まれたとする伝説は「禹生石」であるとして、碑文通り、禹の会同説に則り、景伯況が禹と石紐の関係を語ったのは前漢早期であり、揚雄説は紀元一〇〇年代、すでに二〇〇年の差があると結論する。結局梓潼移住とは何ら関わりなく論を終えている。なお、叢文俊は武帝期から宣帝期ではないかとする。

後漢・巴蜀における景氏 先学の研究に尋ねたところ、先人景伯況は、前漢初期の人、或いは、宦官の家系になって威勢を張っているとの見解も示めされた。それでは景氏一族はだが、いつ、どのようにして蜀への移住を図ったのか。程地干のみ、豪奢な車列は過去のこととして、ただし世襲官吏に相応しく偉容を示して梓潼入りを果たしたとする。以上を踏まえてここで筆者の見解を加え行きたい。

景君碑はもちろん景雲個人を讃えたものであるが、通常、この時代の碑文には、遠い祖先はともかく、当人に繋がる直接の家系（高祖以来）が刻まれるのが通例である。しかし、景君碑には、楚の祖先以降、前漢代の系譜が明瞭でなく突然の如く、先人景伯況とある。しかも、彼の事績は、漢以前の輝かしい前歴を回顧する一幕を含めて、聖人禹の諸侯会同を偲ぶ遺跡訪問となる。その結果が景雲とどう繋がるのか、いくつかの問題点を探っ

「漢胸忍令景君碑」（初拓本）に見る景雲とその周辺

てみたい。

先ず第一に、「大業既定鎮安海内」の結果、景氏は堂々と蜀に移住できたであろうか。この一文は、前漢始め劉敬の豪族徙民策が実って、漢中平原が蛮や残留諸侯の攻撃を受けず安定したということを示したものであり、王朝基盤が安定したばかりで、早速自主的に移住ができたという事にはならないであろう。『漢書』卷一八・地理志卷末に「漢興立都長安、徙齊諸田・楚昭屈景及諸功臣家於長陵、後世世徙二千石高氏訾富人及豪傑并兼之家於諸陵」とあつて監視の目は厳しかったであろう。しかし、碑文は敬伯況が「家于梓潼」と読めるのである。

古来（後漢以前から）、蜀の汶江県近辺は禹に関わる伝説があつた。その一つは揚雄『蜀王本紀』などにある「禹生石紐」説であり、もう一つは本景君碑にある「禹石紐汶川之会」についてである。すでに前項で触れたとおり、揚雄の説は前漢末である（揚雄の死は王莽・天鵬四（一七）年である。）<sup>13</sup> しかも、王莽一族の政治は破綻に向かい、紀元二四年、新は滅亡する。これに伴つて関中も正に天下動乱の中に巻き込まれ、都も東の洛陽に移されそうである。この時を狙つて行動をおこしたのが、景氏を背負う景伯況ではなかったか。

蜀の地に禹の聖地があると知つた伯況は、禹の諸侯会同伝説を本に、かつて楚の公族として、諸侯会盟に加わつた謂われを標榜して、聖地巡礼を実行したのではないか。幃屋甲帳を張り、車に龜蛇の旗を掲げて留連（往来）したのも、嘗て楚の世族であつた誇りをもつて九族を従え、冠蓋を連ね、地元へ威容を示したものと言えないであろうか。

後漢代における景氏の活躍は、王莽新の滅亡と後漢・劉秀建国時期に

活躍し驃騎大將軍・櫟陽侯となつた景丹がいる。ただし、『後漢書』卷五二・景丹伝では「馮翊・櫟陽人」とある。戦国楚の景氏が二〇〇年後には櫟陽に本貫を移した者が出たのであれば、華陰・好畤に徙民した係累と断定することはできないであろう。

**梓潼における景氏を繞る大姓士族集団** 前漢代から後漢中期にかけて、景伯況（沔）・景丹以外、景氏に関わる活動は中央の政官界は無論地方においても、景雲まで現れてこない。戦国楚における三公を維持した氏族としての存在はどこに行つたのであろうか。

ここで後漢一代を通じ、梓潼に根を下ろしたと思われる景氏一族と他氏族との関係にも注目しておきたい。そのことにより景君碑建立に関わる意外な事実も浮き上がってくるのである。

『華陽国志』卷二・漢中志、梓潼郡の条に、「本広漢属県也、（中略）（建安）二二（二二七）年、（先主）分広漢置梓潼郡、（中略）属県六、梓潼県、郡治有五婦山（中略）、四姓文・景・雍・鄧者也」とあり、後漢末、益州牧劉璋から蜀劉備に政権が移る頃の記事であるが、四姓の一つ、文氏は、文斉が王莽の時益州太守となり、後、公孫術につかず、後漢になって、功により鎮遠將軍・成義侯となり、その子純が北海太守となつて後継が続いている。

次に景氏であるが、ここでは景毅・景顧父子の活躍がみられる。景雲活動の理解にも通じるため少し長い引用になるが、次に紹介しておきたい。

『後漢書』卷一六・西南夷伝に「熹平五（一七七）年、諸夷反、（中略）（益州刺史李膺）卒後、以広漢景毅為太守、討定之、毅初到郡、米斛万錢、漸以仁恩少年之間、米至数十云」とあり、『華陽国志』卷一〇下・漢中人士に、



「文堅亟哉南面懷民 景毅字文堅、梓潼人也、太守丁羽察舉孝廉、司徒舉治劇、沔陽侯・相高陵令、立文学、以礼讓化民、遷太守上計吏、守闕請之三年不絶、以子顧師事小府李膺、膺誅、自免、久之拜武都令、遷益州太守、上事吏民、涕泣送之、至沮者七百人白水県者三百人、値益州乱後米斛千錢、毅至恩化暢洽、比去、米斛八錢、鳩鳥聽事、孕而去、三府表薦、徵拜議郎、自免歸、州牧劉焉表拜都尉、為人廉正、疾淫祀、勅子孫、修善為寿、仁義為福、年八十一而卒」とあり、侍御史となっていた子の景顧は、有名な党錮の禁の李膺に師事していたが、『後漢書』卷九七・李膺伝によれば、李膺刑死の際、侍御史であつた景顧は門徒登録牒に漏れていたことが判明し、危うく刑を免れると共に景毅も連座を免れるのであるが、景顧はあえてこのことを公表し、世の人々はこれを義としたと伝えられている。このほか、同じ梓潼出身で、七州に出かけ経学を学び、月令章句など五〇万言の著述をして、有道博士に挙げられるも官につかず一生を節儉に努め天寿を全うした景鸞字漢伯がいる。

ところで、この景毅が益州太守となるについて先に引いた『後漢書』卷一一六・西南夷伝、熹平五（一七六）年に「諸夷反、執太守雍陟、遣御史中丞朱龜討之不能剋、（中略）大尉掾巴郡李顒建策討伐乃拜顒益州太守、与刺史龐芝発板楯蛮擊破平之、還得雍陟、顒卒後夷人復反、以広漢景毅為太守、討定之」とあり、ここに四姓の一つ雍氏が出ると共に、この雍陟こそ熹平二（一七三）年景君碑を建立した本人であり、景氏も共に蛮夷と戦っていたのである。ただし、雍陟が益州太守になったのは、胸忍県令として碑を建てたのち、わずか三年の間のことである。清嚴可均輯『前後漢文』卷一〇六「趙相雍勸闢碑」に次の記事がある。<sup>14</sup>

「漢胸忍令景君碑」（初拓本）に見る景雲とその周辺

「高祖父諱寶、字伯著、孝廉、河南令、侍御史、九江太守（缺三字）君子望、字伯桓、右校令、望之子陟、孝廉、胸忍令、（缺五字）陟弟朗、字仲曼、孝廉、弘農令、武都太守、朗弟勸、字叔（缺）孝廉、成臯令、趙国相、勸子煜、字稚（缺）孝廉、資中長江令、（缺三字）都尉、（略）」（『隸釈』一二）

ここから次の三点が読み取れる。

- 1 右校令雍望の長子が雍陟である。
- 2 雍陟胸忍令の下文（五字缺）には、（益州太守）と刻字されるべきではなかったか。一族が多く孝廉の次に県令相当に就官、その後、郡太守相当に就任していることからその可能性は大きい。

- 3 雍陟の次弟朗の字が仲曼であれば、長子陟は字伯曼である。

このような大姓の活躍は後漢末も続き在地の板楯蛮を用兵に使っている。所で、中村威也は「中国古代地域の異民族について」<sup>15</sup>において秦以来の蜀と巴の夷人対策の相違を述べた後、特に後漢巴郡における「民」と「夷」の関係について、石刻史料、（一）は、『隸續』卷五「巴郡太守張納碑」、その（二）は、『隸續』卷一六「繁長張禪等題名」の二方を以て、碑陰における立碑者の分析を行い、（一）の筆頭者郡掾李氏は宕渠の異民族・賁人であり、他の多くも郡掾の職務を持ち国家の下部官僚として、巴における秩序維持に貢献していたという。また、（二）においては漢人層に混じって多く夷姓が加わっており、『夷』が「民」に変わる可能性を以て、在地における夷人が豪族化して、この豪族集団が巴の治安を守る可能性があったと述べられる。敬服に値する所論であるが、最終末尾に二例を挙げれば、板楯蛮が巴蜀の地域的な不安（周辺の反乱や動乱）に際して、巴蜀豪族の要請を受けて協力したことは、巴郡の豪族が多く異民族であったことを前



「漢胸忍令景君碑」（初拓本）に見る景雲とその周辺

提として成り立つものであると言える。」とされた。しかし、(一)は宕渠蛮すなわち麋君蛮が主体、氏は(二)の夷について族名を明らかにしていないが、地域から見れば宕渠蛮が主体ではないか。白虎伝説は胸忍の夷たる麋君蛮が主体になって始まった(『華陽国志』はそのように書かれている)。それがいつの間にか板楯蛮主体の説話に変化している。白虎夷王の語は麋君蛮すなわち宕渠蛮でも唱える可能性があると思われる、このことは更に後述で補いたい。また、『華陽国志』一には「順桓(一二五—一四四)之世、板楯数反、蜀郡趙溫恩信降服、於宕渠出九穗之禾、胸忍有連理之木、光和二(一七九)板楯復攻害三蜀・漢中」とある。実はこの間、建和二(一四八)年には羌の広漢属国への侵入があったが、板楯の力により完膚無きまでに羌を破っている。宕渠蛮の李特も集団を率いて漢中に転進し、曹魏の支配下に服することになる。巴・蜀における蛮夷の服従と背反は在地豪族化とどのように関わるのか。

『華陽国志』などに依れば、広漢郡には多くの大姓人士が輩出しており、筆者が取りあげた雍氏・景氏など後漢末でも梓潼大姓として板楯蛮を率いて活躍しており、蛮夷が目差すものが豪族化か独立化か、後漢末混乱期以降の推移も考えておくべきではないか、筆者としても改めて考えてみたい。

#### 四 碑面よりみた景君の事績

これまで見てきたとおり、梓潼景氏は後漢一代を通して名望士族であり続けたようであるが、一面、外戚・宦官の争いや清濁官僚の闘争など中央宮廷内の紛争には一線を画していたたたかさも保持していたように

みえる。その一面は雍氏一族にも共通に見え、中央から離れた益州の地において自存をはかる後漢時代における地方豪族の一面が表されていたのではないか。そのような背景を見ながら、景雲自身は胸忍令としてどのような業績を挙げたのであろうか。

後漢靈帝の熹平二(一七三)年、同じ梓潼出身胸忍令・雍陟は、七〇年前の先輩を追悼するため、県城内に碑を建てた。碑文は、景雲の施政が如何に優れたものであったか、県令と民の関係を称揚する。

景雲は、天資(性)明哲であり、胸忍令の前に既に他県令(相当?)を経由し、二所に渡るが、治政は善悪・正邪明らかであり、民に対しては清廉潔白、慈愛に満ちた教父の如くであったが、遺憾ながら任期途中で早没した。いずれ卿尹に上るは必然と思われていたのだが。しかも、民の願いは州郡を動かし、特別な彰勲を朝廷に申請した。しかし、時の朝廷は、和帝(在位八九—一〇四)の末年にあたり、それ迄、若い帝の力により外戚を追放したが、これを頼った宦官の横暴の前に、後漢の政治はここから大きく揺らぎ始めた時であった。その上和帝の薨去もあり、上表は沙汰止みとなってしまった。民は故県令を偲んで三年の喪に服し、歌舞音曲も鳴りを潜め、各所に祈りの声を上げた。

熹平二(一七三)年、梓潼出身の雍陟による功德碑は、景雲がいかなる政治的実績を上げたのか、具体的な事例を挙げていない。先に景毅が益州太守として短期間に米価を下げ、地元民の賞賛を浴びたなどの例が景雲には無かったのか。ただし、管轄する県政が破綻無く収まっていたとすれば、それも一つの実績であろうか。程地宇が神道碑と指摘するように、雍陟がひたすら賛辞を捧げる意味をどう理解すべきか。次の二点を考えておきたい。

その一は、景雲が没するまでの約一〇〇年間、人口の増加、周辺民族を抑えた領土維持拡張、学術・文芸の発展など、王朝草創期の緊張関係は四代和帝前半まで何とか持ちこたえてきた。しかし、宮廷における外戚の権力拡張、それを阻止する宦官を引き入れての皇帝側の実力排除などによる中央政治の混乱は、次第に地方統治の弛緩に繋がっていった。正にその直前、比較的平穩な治政のうちに景雲は命を閉じたのである。

その二に、雍陟が胸忍令として就任している間は、すでに後漢の統治は引き続き幼帝の就位などによる外戚・宦官・清流官僚群の深刻な対立のはてに、地方政治は州牧独裁の方向に進もうとする時であった。さらに、西北・西南地方蛮夷の反乱も中央は地方有力士族の力に頼らざるを得なくなってきた。益州においても、広漢郡梓潼地方には、伝説的に漢民族政權に協力してきた板楯蛮があり、その助け無しには西南諸蛮夷の反乱は排除できなくなっていた。すでに見てきたように、梓潼の有力氏族、景氏や雍氏は、在地に抱える板楯蛮を引き入れ、反乱を起こさぬよう、豪族同士の協力は欠かせない。そのようなとき胸忍令に就任した雍陟は、七〇年前、在地の少数蛮族をも無事納めていたであろう景雲の手腕を追懐していたのではないか。また、郢の都以来の楚の公族であった景氏一族を賞賛して、来る困難を共同で防衛する保証を取り付ける目的もあったのではないか。ここで、後漢時代の胸忍県を概観して置きたい。

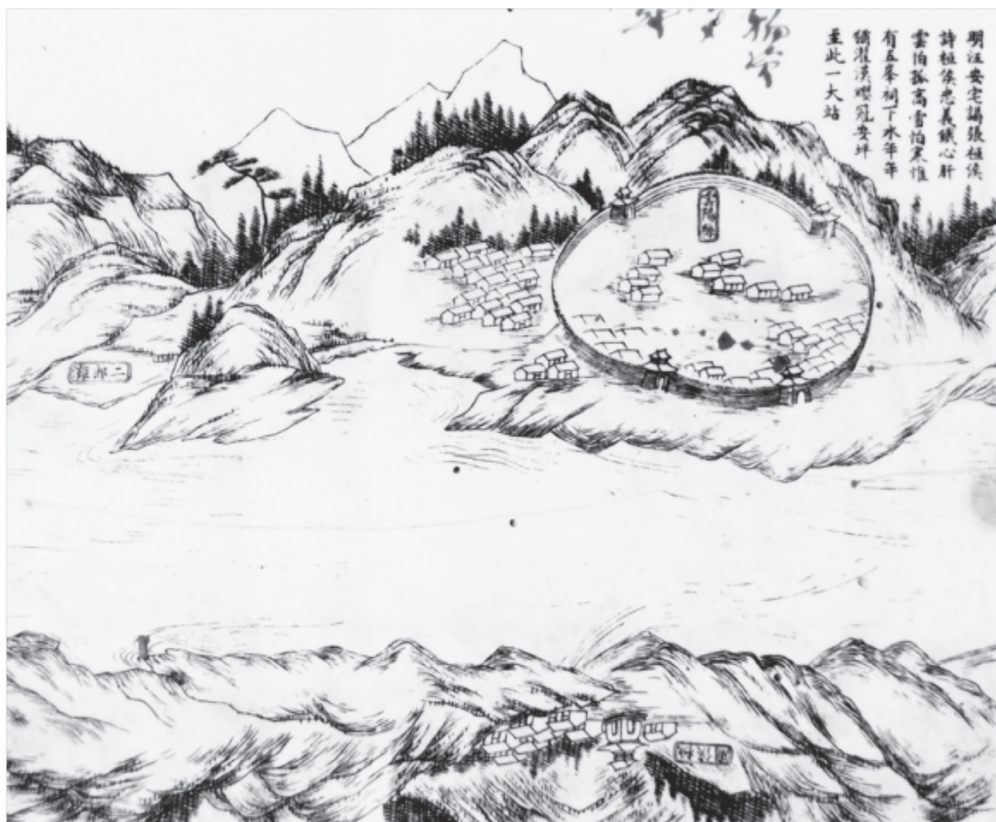
## 五 胸忍県の歴史と後漢時代の胸忍県

最初に胸忍県は現在のどこかに触れておきたい。中国・長江中流域の三

峡ダム工事はすでに完成しているが、ダムの少し上流に、重慶市雲陽県がある。その三〇キロほど西に胸忍県の旧県城があった事が発掘作業の結果判明し、本論で扱う景君碑が出現したのである。現雲陽県は三峡ダム工事による埋没地の移民を多数受け入れ一二〇万人を越える大都市である<sup>16</sup>。

胸忍県は秦代から知られる県であった。『漢書』卷二八、巴郡に「秦置属益州」とあり、統県一の中に、「胸忍 容母水所出南、有橘官・塩官。師古曰胸音劬」とある。劬は「ク」である。ただし、王先謙『漢書補注』はクジンと読むほか「闕駟十三州志乃云、胸音春、忍音潤、其地下湿、多胸臛虫、因以名県（以下略）」とシュンジュンとも読み、湿地における胸臛虫（蚯蚓ミミズか）によるという。ただし、秦昭襄王の時、巴・蜀に白虎がでて群虎を従え、荒らし回ったため、この時『華陽国志』卷一・巴郡の条に「秦王乃重募國中、有能煞虎者、邑万家、金帛稱之、於是夷胸忍廖仲・葉何、射虎、秦精等乃作白竹弩、於高楼上射虎、中頭三節（中略）煞群虎大咆而死」とある。この後、前漢高祖と板楯蛮の白虎復夷説話に転換する有名な説話であり、これ以上には立ち入らないが、この中で「夷の胸忍廖仲・葉何・」とある。胸忍が夷の総名なのか、夷人のいる所なのか議論のあるところであるが、いずれにせよ夷に関わる土地として、後人が蔑称を加えたものではなかったか。ともかく胸忍県の歴史を続けよう。

『後漢書』卷三三・郡国志、巴郡には、「秦置、雒陽西三千七百里（劉昭注ⅠⅡ後述）、十四城、戸三十二万六千九十一、口百八万六千四十九」とあり、「江州（注略）、宕渠有鉄、胸忍（劉昭注 巴漢志曰、山有大小石城勢）、（閬中県以下略）」とある。劉昭注Ⅰは後漢末、巴郡の領域が広大であり、治安を維持するには数々の困難が伴い、年末の中央官署への郡吏の



雲陽県古城・対岸桓帝廟あり  
国璋著『川行必読峽江図巧』(光緒 15(1882)年)



長江流域の雲陽県〈2014,10,13Google earth から〉(人口 129 万人)



諸報告も纏めきれない内に期限を過ぎ、怠慢の罪をもって処罰すら受けかねないと、郡を分ける議論がやかましくなってきた。そこで「譙周巴記曰、初平元（一九〇）年、趙穎分巴為二郡、欲得巴旧名、故郡以墊江為治、安漢以下為永寧郡、建安六（二〇二）年、劉璋分巴、以永寧為巴東郡、以墊江為巴西郡、（以下略）」となる。もちろん胸忍も分郡の議の対象で、永寧郡、巴東郡と郡名・郡治の変更があったが、後漢後半、蛮夷の反乱、長江を利用した盗賊（『華陽国志』巴郡に記載あり）の跋扈など次第に治安が懸念される県でもあった。

次の『晋書』卷一四・地理志、巴東郡に「**胸忍県**」があり、「**華陽国志**」卷一に「巴東郡、先主入益州改為江閬都尉、建安二十一（二一六）年以**胸忍・魚復**（空格＝漢豊）・羊渠・及宜都之巫・北井六県為固陵郡、武陵康立為太守、章武元（二二二）年、**胸忍**の徐惠、魚復の蹇機、以失巴名、上表自訟、先主聽復為巴東」とあり、その同郡**胸忍県**には「郡西二百九十里、水道有東洋・下瞿數灘、山有大小石城・勢靈寿木（当有橘園二字）塩井・靈龜、咸熙元（二六四）年献靈龜於相府、大姓扶・先・徐氏、漢時有扶・徐、荊州著石（名？）楚訪（記？）有弭頭白虎復夷也（注略）」とあり、『水經注疏』卷三三に「彭溪水又南逕**胸忍県**西六〇里、南流注于江、謂之彭溪口、江水又東左逕**胸忍**縣故城南、常璩曰、県在巴東郡西二九〇里、県治故城、跨其山阪、南臨大江、（中略）江水又東逕瞿巫灘、即下瞿灘也、又謂博望灘、左則湯溪水注之、水源出県北百余里上庸界、翼帶塩井一百所、巴川資以自給、粒大者方寸、中央隆起、形如張傘、故因名之曰傘子塩、有不成者、形亦必方、異于常塩也、王陰《晋書地道記》曰、入湯口四十三里、有石、煮以為塩、石大者如升、小者如拳、煮之、水竭塩成、蓋蜀火之倫、水

火相得乃佳也」（傍線筆者）とあり、**胸忍県**管轄に塩井が有り、巴一郡の経費を稼ぎ出すという。**胸忍**はこのほか特産物に柑橘類もある富裕な県であった。

因みに雲陽県の製塩産業は、遅からず漢代以降現代まで欠かさず続けられ、考古学的発掘の結果から見ても「雲陽県の支柱産業であった」という<sup>17</sup>。

**後漢における胸忍県の管轄範囲** この**胸忍県**も晋代には**胸臈**と文字が改まり、北周時代に雲安県、宋代に雲安軍から安義県、元代雲安軍から雲安州、明代以降、雲陽県と名称変更があり、現在に至っている。明『正徳夔州府志』<sup>18</sup>雲陽県の条に、「府城（奉節県）西一百七十里・万県府城西四百五十里本漢**胸臈県**属巴郡」とあり、更に、「梁山県府城西六百里、本漢**胸臈県**地」「開県在府城西四百七十里、本漢巴郡**胸臈県**地」とあり、**胸忍県**令は、**胸忍県**・万県・開県・梁山県（現梁平県）の四県を合わせた地域を管轄しなければならなかった。現在の重慶市配下の県別面積で合計が一二、九五五平方キロメートルの広大な地域である。日本では新潟県にほぼ匹敵する。しかもこの地域は長江流域を東西に行動できる蛮夷の居住する地域でもある。

**胸忍県と蛮夷** すでに本論でも、巴郡において板楯蛮が活躍することについて触れてきた。この地域の蛮夷についての史料は『後漢書』南蛮伝を中心とする。范曄『後漢書』は宋代の成書であるが、南蛮伝は西晋・司馬彪『続漢書』に依っている。この南蛮伝（卷一一六）の主体は、麋君蛮と板楯蛮である。麋君蛮は武落鍾離山（清江沿という）から発し、夷城に止まり、死ぬと白虎と化したという。秦惠王が巴中を併せ、巴氏を以て統率させ、君長に対する安い銭と夷民に対する布と鶏の羽を租賦として課した



「漢胸忍令景君碑」（初拓本）に見る景雲とその周辺

という。漢代も秦の故事に倣ったが、後漢の始め、初めて反乱を起こし、その種人七千人を沔中（湖北省、江漢平原）に遷し、江夏蛮と言った。しかし、麋君蛮は巴郡にも残り、宕渠蛮とも言われ、更に長江三峡沿い山麓の狭隘な土地（坪壩）に散居する巫蛮も麋君蛮と言われる。<sup>19</sup>

同じ南蛮伝で巴の閬中中心に住む板楯蛮は秦・昭王の時、巴蜀を荒らし回る白虎を射殺しその功により殆どの租を免じ、漢高祖の時も関中に従軍してその功により中心の七姓には賦租を免じ、その余も安い税すなわち**賁**を払う**賁**民となり、漢の支配に従っていたとする。ただし、『華陽国志』<sup>20</sup>とはその内容が異なる面が多く有り、これら南郡蛮についての詳しい研究に谷口房男の研究が有る。谷口は言う。「こうした板楯蛮・白虎復夷・弼頭虎子・賁人・巴氏・麋君種を同一種族の別称とする見解は、後漢書卷一一六南蛮伝に、巴郡南郡蛮である麋君が死し、その魂魄が化して白虎となり、（一方）その白虎を優れた武器である白竹の弩（板楯蛮名の由来）を用いて討ったとし、さらにこうした功により用役を負担したが免除され（莫徭の由来）、きわめて軽い租税（賁人の由来）を負担したとするとことから生じたのである。こうした来歴より、板楯蛮が、麋君種と同一と見なされるようになり、それ故に南北朝時代において、板楯蛮が見られなくなったのではなからうか。なお、伝説の成立時期とその背景、更にその内容を検討すれば、もともと麋君種と板楯蛮とが同一種族ではなく、両種の居地が近似し、また、両種の種族上の変化が見られる南北朝時代に出来上がった後漢書の蛮伝が、両種の来歴を関連的な伝説としてまとめたものであり、その後に成立した諸書が板楯蛮について殆どふれず、麋君種に一括してしまっただけではなからうか。」という。<sup>21</sup>

ところで、景雲が**胸忍**令在任中、**胸忍**の夷すなわち麋君蛮の反乱はあったのだろうか、谷口房男によれば、後漢創設以来南郡蛮の反乱は二回のみで、その一回は和帝の時、『後漢書』卷四・和帝永元一三（一〇一）年二月に「巫蛮反、寇南郡」と有り、同書卷一一六・南蛮伝に「和帝永元一三年、巫蛮許聖等以郡收税不均、懷怨恨、遂屯聚反叛」とあり、可なり大規模であったようで、同書・同伝に「明年夏、遣使者督荊州諸郡兵万余人、討之、聖等衣憑阻隘、久不破、諸軍乃分道並進、或自巴郡・魚復數路攻之、蛮乃散走、斬其渠帥、乘勝追之、大破聖等、聖等乞降、復悉徙置江夏」とあり、若し、景雲が県令であつたら放っておけない大事件であつた。幸い、事件は**胸忍**の東、魚復県以東で起こり、処置された。その後、後漢の中央の政治が乱れると共に、江夏蛮を含んだ南郡蛮の反乱は後漢末にかけ、特に桓帝の時代（一四七―一六七）は大きな反乱が九回起きている。雍陟が建碑した熹平二（一七三）年は、靈帝（一六八―一八八）在位中で板楯蛮の反乱も四回起こされている。<sup>22</sup>また、中平五（一八八）年三月に建てられた「巴郡太守張奐碑」に「刑無斧鉞之害、行無拘縶之人、**胸忍**蛮夷、滔天蠢動、乘虛唐突（五字缺）忿（缺）斯怒、爰整干戈、（以下略）」とあり、碑陰に「中平五年三月上旬書、君升台祚」とある。<sup>23</sup>雍陟は足下の**胸忍**夷の動向にも気を配らなければならなかったのである。

## おわりに

碑刻に慣れない筆者は、中国において国宝級と言われる出土品をどう扱うべきか、初拓本を見て長い間ためらっていた。しかし、長江・雲陽県は

船からであるが四度ほど眺めたことでもあり、そこに住む人々の歴史を是非知りたいと思う気持ちが大胆にもわき上がってきた。紙数の関係もありどの節も十分に趣旨を尽すことが出来ず、その責は今後自分自身が負わなければならぬと自覚している。ただし、今回は、東洋大学史学科高橋継男教授の石刻史料研究法に啓発されること多く、例えば「近五十年来出版の中国石刻関係図書目録（稿）」（『唐代史研究』第四号二〇〇一年六月）ほかの諸目録、「洛陽出土唐代墓誌四方の紹介と若干の考察」（『東洋大学文学部紀要・第五二集史学科第二四号』等々により多くの示唆を与えられ感謝申し上げたい。史料収集でお世話になった東洋大学アジア文化研究所の佐藤三千夫客員研究員、東方書店大橋隆一君にも感謝する次第である。

## △注▽

- 1 本碑の紹介は、中国鄭州・河南美術出版社『近年新出歴代碑誌精選系列』（周俊傑主編）に「漢胸忍令景君碑」（薛海洋・陳輝編・二〇〇八年六月）として出版されたものである。
- 2 程地宇説については注6参照。
- 3 この碑の紹介にある上部暈形に刻まれた朱雀・玉兔は、前漢中半以降、墓碑銘或いは墓室の画像石・画像磚に見られるモチーフと共通であるが、後漢時代の巴・蜀地方において盛んに描かれたものである。程地宇論の「三、《景雲碑》石雕探秘」、龔廷万・龔玉、戴嘉陵編著『巴蜀漢代画像集』（文物出版社一九九八年二月刊）、拙稿「三足鳥原像試探」（『アジア文化研究所研究年報四八号二〇一四年二月』）参照。
- 4 高澤浩一「何君閣道摩崖の書―四川省刻石に見る一形態―」（『書学書道史研究』一七号・二〇〇七年）は、四川・漢代刻石の二大特徴を挙げられ、「その一点目が他地域に例を見ない大字書の存在であり、今ひとつが、刻まれた文字の周囲を溝を掘って、枠をつくるという形態が成されていることである。」

「漢胸忍令景君碑」（初拓本）に見る景雲とその周辺

（ここで八個の字蹟とそれらが枠の中に見事に収まっている例を示し、その他の出土例から見ても）「四川省固有の枠様式の一例といえよう。（中略）ひきつづいて、一九四一年四川省廬山県石羊村から出土した《王暉石棺銘》である。この石棺の四周には大きく神獸がレリーフされ、上側に墓主の王暉を弔う銘文が、八部隸で三五字刻まれる。この銘文にも四周が溝で彫られる枠をしつらえてある。ただし、この枠はレリーフされた建物の扉を模して描写（仙童と呼ぶ人物が扉を半ば開く様子を描く）されている点で、他例と相違する。」と、漢代・四川における刻石の選別を指摘されている。一方、景君碑も解説に指摘の通り銘文の四周が枠線で彫られているばかりでなく、その外側花紋のレリーフの四周も枠線で囲っている。ただし円頂部と碑文枠とは明瞭に断線が彫られており、円頂部は三個の山中を象るような曲線で分かれており、後漢代他の碑に見られる銘題はなく、その真ん中は入り口を示す枠線が彫られ、「扉を押えた（掩）婦人と、左に朱雀（鳳凰）か、右に玉兔が彫られている。この婦人が扉を「掩」していると解説するが、掩には遮蔽、藏匿或いは閑閉といった、ふさぐ、しめる意味合いが強く、高澤説の「扉を中半開く」とは異なるようである。また、王暉石棺の仙童にたいしては西王母なども考えられるのではない。いずれにしてもレリーフは景君を悼んで仙界に迎えようとしている構図ではないか。

5 側面の青竜・白虎の上部に描かれた円形の模様は拓本では全面黒色でそこに描かれたものが何か、判じようがないのであるが、あえて憶測すれば、青龍の上は金鳥或いは三足鳥であり、白虎の上は、ヒキガエル或いは兎とヒキガエルが彫られていたのではない。実物を眺める機会を得て居らず残念である。

6 叢文俊は景君碑を功德碑と位置付けるが、程地宇はこれを神道碑であるとし、漢以降後漢にいたる神道碑の系譜を示し、「則ち、神道の名は漢に既にあり、これらの説では、神道碑の最初は墓道入り口（塚口）にあり、後、墓の兆（しるし）を東南方に立て、再び後に墓前に神道を開き石柱を立て標識とし、石碑を道の傍らに立てる」とし、景君碑については、次の四点から神道碑であるとする。則ち

一、暈と穿があり、暈が三重で穿が一つであることは、厳然たる神道形式で、漢代神道碑は通常穿があるものであり、（多くの碑例を挙げ）碑は墓前、墓側、或いは枕道にあり、穿は犠牲をかける碑に由来し、下の柩の縁（ふち）にある碑である。

「漢胸忍令景君碑」(初拓本) に見る景雲とその周辺

二、神道碑の初めは、必ず其の世系を詳しくし、その出でる所を重んじ、一〇字六字、その殆どに銘文があり、多くて七〇〇字少なくて三〇〇字である。  
三、後漢の功德碑の殆どには、碑額があり、或いは首行に勲功銘、功德次第が記され、またその銘の末尾に頌の字が付されるのが普通であるが、景君碑にはその功德、功績或いは頌が無い。

四、功德碑の類は碑主の功績を称揚する事が主であり、余さず誇張美化するものであるが、景君碑は、景君頌徳を歌う辞があるも、非常に抽象的であり、永永不滅の語や、嗚呼哀哉を繰り返すなど、功德碑の形式に異なるものである。

7 次注8の八分隸書の書体および九族は同姓直系をいい、九族が妥当と思われる。  
8 注14により曼とするのが妥当である。

9 『漢北海相景君碑』解説者松井如流(二玄社刊、一九六一年一〇月)参照。  
10 浜口重国「漢代における地方官任用の本籍地との関係」(『歴史学研究』一〇一・一九四二)。

11 李喬は王逸『楚辞・離騷序』の「三閭之職、掌王族三姓、曰昭、屈、景」を引き、程地宇などの所論を元に「蓋以所出君之諡為氏」とし、最近の考古学的成果により、楚文字躬Ⅱ景とみられ、平王の本来の諡は躬坪(平)の双字諡で景氏は平王からであるとする。そのほか、徐中舒による頃襄王説などを紹介している。

12 宇都木章「戦国時代の楚の世族」(『宇都木章著作集二 春秋戦国時代の貴族と政治』歴史学叢書・宇都木章著作集 名著刊行会 二〇一二)

13 この段の幃屋甲帳、龜車の解説は魏敬鵬に詳細があり本論では省略する。

14 清敵可均輯許振生審訂『全後漢文下』(商務印書館一九九九)による。

15 中村威也「中国古代西南地区の異民族―特に後漢巴郡における「民」と「夷」について―」(『中国史学』第十卷 二〇〇〇年十二月二五日)

16 『長江大辞典』(武漢出版社一九九七年)

17 『中国塩業考古・第三集 長江上游古代塩業与中壩遺跡の考古研究』(科学出版社二〇一三年九月) 文及び図版参照

18 明吳潜修、傅汝船纂明正徳刻本「夔州府志十二卷」(天一閣蔵明代方志撰刊) 中国において、板楯蛮と廩君蛮の位置関係など未だに議論があるが、例えば徐中舒は「巴蜀文化初論」(四川大学報一九五九第二期)「三、巴地所在及其歴史」において、世本による廩君蛮記事を引いて、廩君蛮の後が板楯蛮で

あるとした。繆鉞「『巴蜀文化初論』商榷」(四川大学学报一九五九、第四期)は「三、板楯蛮与廩君蛮族属異同的問題」において、板楯蛮と廩君蛮は同族ではないとした。中国側の最近の考古学的成果(紙数の関係で詳細は避けるが)は、廩君蛮は三峡地区巫・巴山系を中心に長江沿岸地帯中心に居住したとする説が多い。

20 谷口房男「華南民族史研究」(緑陰書房一九六九)

なお近着の周勇主編『重慶通史』第一冊、第一巻古代史・第二章第二節二、**賁人**(板楯蛮)において、全面的に板楯蛮の別称が賁人であるとし、居住地も白虎復夷伝説も全て板楯蛮のものとしているが、宕渠蛮乃ち廩君蛮が白虎伝説を持つこと、その後賁人としての李特集団が漢中に出たことなどについてはふれて居らず、また、「四、蠻人」の項で蠻人が廩君であること、湖北省清江に発する伝説を持つことなどを挙げ、巫・巴山地帯一帯に住む、僕人種であるという。(二〇一四年四月・重慶出版社)

21 注20書「第四章 蛮族の伝承をめぐって」八九―九〇頁  
22 注20書・第一章後漢時代の武陵蛮一七頁表2。

23 清敵可均輯『全後漢文』巻一〇五「巴郡太守張納碑」(『隸釈』五)による。

(客員研究員)